コードギアス反逆のルルーシュ～双璧の白騎士～

熊海苔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コードギアス反逆のルルーシュ～双璧の白騎士～

【Ｎコード】
Ｎ２３４７Ｍ

【作者名】
熊海苔

【あらすじ】
とあるエンジン（ドライブ）を生み出した男はエンジンのせいで死んだ。
そして神に復活を強制され、パートナーにとあるキャラを引き連れ飛ばされた。どうなる事やら……

ＳＴＡＧＥ－００－１　エンジンの目覚め（前書き）

どうも、無謀な熊海苔です。
コードギアス始まります！

STAGE－００－１　エンジンの目覚め

俺の名前は鷹野琴音（たかのことね）、名前が女っぽいがれっきとした男
歳は今年で２５、職業はまあ研究者みたいな感じ何を研究しているかと言うと
永久的にエネルギーを生成できるエンジン、俺はドライブって呼んでいるんだがそれの研究。
そのドライブが明日には完成する予定だ。

「にしても、完成まで意外と時間が掛からなかったな」

そう一人呟くが返事などない、なんせここはあまりにも危険な研究やら実験やらをするので
助手が一人も来なかったのだから、まあ別段困ることはなかったが寂しいっちゃ寂しい
それにここは都心に近い所なのだが周りに迷惑が掛からないように逆シェルターになっている。
なんせこのドライブには核が使ってあるため失敗すると周りが焼け野原になってしまうから
ようするに俺の部屋の中の物を使うと1月で世界の半分を潰せる力がある、そんな事しないけどな。
俗に言うオーバーテクノロジーと言うヤツだ。

「さて、今日はもう寝るかね」

そして床についた

＊＊＊＊
朝

「ふぁ～……眠いけどドライブの仕上げをしないと」
顔をひとまず洗い、製作作業に戻る。
手順を一つでも間違えればお陀仏物の作業だ、だから今日は慎重に作業を進めなくてはならない
作業をすること2時間、やっと終わりが見えてきた。ここで一旦休憩を取る事にした

「ふぅ～あと少しで完成か……長かったような短かったような…でもまあおもしろかったからいいか。まあ出来たら出来たでかなり危ない品物になっちまうけど大丈夫だろう」

なにせ、ここを管理するのは俺自身なんだから誰も中に入れなきゃいい話だ
さて、あともう少し頑張りますか。

そして……

「できたぁ！」
「それはよかった。ではそれを私達に渡してください」
「何者だ！なぜここに入れる！」
「そうですね。私は軍の者です。そしてそのエンジンを預かりに来た、と言った所です」
「んなもん、誰が渡すか」
「ちっ……こっちが下手に出れないからって調子に乗りやがって、お前を殺す事だって出来るんだぞ？」
そこには、黒いスーツを着た男が銃を構えて立っていた。

そして俺は男を見て不敵に笑った。

STAGE－００－１　エンジンの目覚め（後書き）

また見てギアス

すいません。調子に乗りました。

STAGE－００－２　ギアスの世界へ（前書き）

書き方が読みにくいようでしたら
どんどん言ってください

STAGE－00－2　ギアスの世界へ

「この状況でどうするつもりだ？それをさっさと渡せ」
「いや、渡さない。これは正しい事のために使う。軍になんかに渡さない」
「馬鹿を言うな。貴様は何も出来ずに死ぬだけだ」

その言葉を聞いて俺はほくそ笑んだ

「じゃあこれが何か分かってるか？」
「エネルギーを永久的に生産できるドライブだろ？当然の事を」
「中にはさ、核が入ってんだよ。だからここで爆発させたらどうなる？」
「なっ、まさか貴様！この研究室ごと吹っ飛ばすつもりか！？よせ！こんなオーバーテクノロジーを無駄にするのか！？」
「人が人を不幸にするのなら、俺はここで終わらせる」

そして俺はドライブを暴走させた。
そして――

俺がこの世から消えた瞬間だった

どこかを漂う浮遊感。

不安はないことはないがまあ、大丈夫だ。
少し経つと背中に固い感触、たぶん地面か床だ
すると頭に強い衝撃が走った。そしてかなりの距離を吹っ飛んだはず
痛みに涙を滲ませながらノロノロと起き上がった。

「何すんだよ！」
「お前が起きないのが悪い。ついでに自己紹介と行こうか、わしは神」
「はぁ？神？あんた馬鹿か？」

その言葉に神さんの顔に青筋が浮き、手になんかを集め始めた。しかもかなりヤバそうな物

「ちょっ、すいません。いきなりの事で気が動転していまして、今のような発言してしまいました。自分は鷹野琴音です」
「あ～、そこまで畏まらんでよい。では本題に移らせてもらう」
「本題？俺は死んだはずなんだが……」
「うむ、死んだ原因が人々の幸せのためなのだろう？それでその才能でもう一つの世界を救って欲しい」
「もう一つの世界？しかし、俺だけでは何とも言えないが」
「大丈夫だ、そのための能力を授けてある。そしてパートナーを自分で選んでもらってかまわない。
二次元の者なら原作が壊れんようこのグローブで二人に分けられるからな」

パートナーねぇ……二次元でもオッケーって言ってたからな、やはりアイツをパートナーにするか
「なら、グローブを貸してくれ。んで、幻想郷に送ってくれれば嬉しいんだが…」
「幻想郷と言えば東方だな、チルノか？」

「詳しいな、神さん。俺がパートナーに欲しいのはチルノじゃなくて、霊夢だ」
「魔理沙でもなく霊夢か……お前も中々だな。では行ってこい。ちなみにここにはグローブを取れば戻れるからな」
「あいよ」

そして俺は幻想郷に向かった。

「いだ！」

森の中に琴音の声が響く
博麗神社の傍の森の中に来れたらしい。

「え～と、霊夢さ～ん？いらっしゃいますか～」
「は～い、何でしょう」

蔵らしき中から巫女さんが出てきた。

「貴女が霊夢さんですか？」
「そうですが、どうされましたか？」（おさい銭入れてくれるかも！）
「実は話があって、少し話せるか？」
「時間はあるけど、見ず知らずの人が私に何の用なの？」
「だから話がある、座って話せるとこあるか？」
「じゃあ、本堂で話を聞きましょう」
「まず俺は琴音だ」
「どうも」
「本題なんだが、俺と一緒に来て欲しい」
「いきなりなんなの？私にどうしろと？私はここから動く訳にはいかないの」

「それは知っている。だから君を二人に増やす」
「はぁ！？それ本気で言ってるの？」
「本気だが？試しに二人になってみるか？」
「やれるもんならやってみなさいよ」

え～とどうやるんだ？
『頭を叩け』
マジ？
『マジ』
りょーかい

「なら、すまん！」
「え？何がっ！？……」

頭を叩くと霊夢が二人に増えた。
作戦成功

「うわ！ホントに私二人になっちゃった。でも…」
「大丈夫だ、能力は半分になっていない。そのままだ」
「ここまでやられたら信じるしかない…か…」

バタッ、いきなり霊夢が倒れてしまった。とりあえず片方をお持ち帰りと言う事で

「うわっ……軽い」

霊夢をかつぎあげグローブを取る。すると景色が一変する

「ふむ、お帰り」
「ただいま…」

「あとは説得するだけだ、頑張れ」
「一番大変じゃん！？」
「う……ん……こ、こは？」
「うむ、起きたようだな、ここは～……う～んなんと説明するか…」
「あの霊夢さん、さっきはすいませんでした」
「あっ！さっきの……あれ？こんな可愛い子だったっけ？」
「は？おい、神さん、鏡よこせ」
「ほら」

そこに写っていたのは高校生の俺だった。
髪は長めで結構女顔、身長は１６５くらい……
お帰り俺の黒歴史

「何をした？」
「いや、今から行く所は高校生の方が都合がいいんだよ」
「何話してるのよ？」
「あ～と……実は…」

～説明＆説得中～

「なるほど、それで私に一緒に来て欲しいって言ってた訳か」
「うん、頼む！このとーり！」
「なんで私なの？」
「あ、いや、その……霊夢が……」
「私が何？」

マジで言わなきゃならんのか？

「霊夢が好みのタイプだから…」
「え！……あのでも私じゃ」

「俺と一緒じゃダメか？」

霊夢が好みのタイプなのは事実だから、嘘は言ってない

「ダメじゃないけど…」

「なら、一緒に来てくれ」

「ああもう！いつまでもくよくよしてらんないし、一緒に行くわ」

「よっしゃ！」

「では、出発だ。行き先はギアスの世界だ。頑張れよ」

俺達の下に穴が空く。要するに霊夢と穴に落ちて行く

あぁ～また地面に尻餅パターンかと思えばかなり高い

「あんのくそ神がぁあああ！！」

霊夢を抱き抱えて衝撃に備える。しかし、その備えは無駄だった、

証拠に俺は気絶したのだから

「いつつつ……え！琴音！？」

「きゅぅ～」

私の隣では琴音が気絶してしまっていた。

「会長、向こうからスゴイ音が聞こえましたが？」

「う～ん、なんだろーねー」

男の人と女の人の声？

あれ？ここって学校？

「この辺りかしら？」

「あそこから煙が立ってますから、あそこですよ」
「あら？女の子二人はっけ～ん」
「あの助けてくれませんか？琴音が気絶してしまいまして…」
私は金髪の会長と呼ばれていた女の人に頼んだ。
「そうねぇ……ルルーシュ、この子を運んで」
「会長！？危険過ぎます。学校の生徒ではなさそうですし」
「あら、困ってる時はお互い様って言うじゃない？なら助けるべきだと思うわよ？」
「しかし……はぁ…わかりましたよ。どこに運ぶんですか？」
「んじゃ、保健室に連れてくわよ。ほらほら、男子。ガーッツ！」
「はいはい。まったく、人使いが荒いんだから」
「ありがとうございます」
「あ～、そんなに畏まらなくていいから。早く行きましょ？この子が心配何でしょ？」
そして私達は校舎らしき建物の一室に向かった

STAGE－01　アッシュフォード学園（前書き）

少し手直しを加えました

STAGE－01　アッシュフォード学園

俺が目を覚ますと、そこは部屋の中だった

「ここは？……霊夢？」

自分が寝ているベッドもたれるように寝ている霊夢に気付いた。

「おちおち寝てもいらんねぇか……さてベッドに寝かせるかね」

「あ、起きた？」

俺が霊夢をベッドに寝かせた時に金髪の女の人が入ってきた。まあ誰かかは分かってるけど…

「みんな、入ってきていいわよ！」

「すいません、ご迷惑をおかけしました」

「いいのよ、それよりその子にお礼を言っておいてね」

会話をしていると生徒会メンバーが入ってきた

「じゃあ、自己紹介を始めましょ」

念のために霊夢を起こしておく

「ん……何？あ、起きたんだ」

「じゃあ、まずルルーシュから」

黒髪の少年があいさつをする
「……ルルーシュだ。なぜ学園に居た？」
「ほら、ルルーシュ威圧しないの」
次に茶色っぽい髪の少年
「枢木スザクです。よろしく」
次に活発そうな少年
「俺はリヴァル。リヴァル・カルデモンドね」
次に明るそうな女の子
「私はシャーリー。よろしくね！」
「で、君達はなんなんだ？」
「俺は琴音だ」
「私は霊夢。琴音のパートナーよ」
「住む所はあるの？」
「ない……な」
「なら、見つかるまでここで暮らしたらどうかしら」
「はぁ？！会長、危険過ぎます。それよりも何者なんだ君達は」
「何者、ねぇ……知らん自分でもわかんねぇんだ」
「記憶はある？」
「生活に関する事なら」
「私も琴音と同じね」
「ほら、心配じゃない。それに御祖父様から許可は取ってあるから大丈夫よ」

「はぁ……俺は知りませんよ？」
「いいじゃない♪じゃあ自己紹介の続きね。こっちの眼鏡の子がニーナ。あっちの大人しい子がカレンよ」
「……どうも」
「よろしく」
「で、あっちにいる可憐な少女が、ナナリー」
「よろしくお願いします」
「そして私はミレイ。ミレイ・アッシュフォードよ。
ここ、アッシュフォード学園の生徒会長をやっているわ」

最後にミレイ、う～ん…さん付けの方がいいかな？
コホン、ミレイさんが締めくくった。

「それじゃあ、今日はもう遅いし休んでね」
「あっ、そうだ琴音」
「どうかした？シャーリー」
「女の子なのに俺はどうかと思うよ？」
「は？俺は男だぞ？」
「「「「「……」」」」」

ルルーシュとスザク、リウ゛ァルはもう退席していないが生徒会の女子メンバーからの静寂が怖い

「いや、だから俺は男」
「「「「えぇー！？」」」」
「確認するわよ！みんな、琴音を押さえて！」

シャーリー達が襲い掛かってくる。

「ちょっ！？や、やめろ！カレン力強い！腕痛いから！」

「あ…ごめんなさい」
「そして……シャーリー！胸を押し付けるな！恥ずかしい！」
「ふっふっふ、観念しなさい　。そりゃ！」

＊＊＊＊

「ごめん……ホントてっきり女の子だと…」
「す、過ぎた事だから……」

そこへ救世主が来た

「あのさ琴音」

スザクである

「どうした？」
「このボール状の機械について話が聞きたいんだけど…」
「な！なんでそれがここにある！？」
「君が持ってたんだよ。念のために僕が預かってたんだけど、ダメだったかな？」
「いや、いいんだが……返してくれないか？」
「分かってるんだけど、返す代わりに明日一緒に行って欲しい所があるんだ」
「交換条件か……どこに行くんだ？特派か？」
「あれ？僕は一言も特派なんて言ってないのに……まあいいや、特派で精密な検査を受けて欲しいんだ」
「なんでまた」

あまりにもいきなり過ぎる、ご都合主義か？

「すごい高い所から落ちたらしいから心配で」
「分かった。いつごろ行くんだ？」
「放課後に行こうと思うんだけどいいかな？」
「大丈夫だよな？霊夢」
「そうね、じゃあ私達はそれまで祖界を散策してるわ」
「うん、分かった。でも気をつけてね」
「りょーかい」

そしてその日はお開きになった。

朝

「おはよう！よく眠れた？」
「今の大声がなければ」

あ～、まだ耳鳴りがする、地味にダメージがあるな

「ゴメンゴメン、それより制服の寸法を計りに来たんだけど……霊夢は？」
「今は……シャワーを浴びてるな」
「なら、琴音から採寸するわ」
「そもそも、なぜ制服？」
「二人とも今の服装じゃ目立つじゃない？かたや巫女服、かたや白衣だもの」
「はは、そうだな」
「それに、二人とも制服が似合いそうだから！」

……今、本音がポロリと出たよな？
そして1時間弱で採寸も終わり、ミレイさんは出て行った。

ＳＴＡＧＥ－０１　アッシュフォード学園（後書き）

なぜ霊夢を選んだかって？東方キャラで一番好きだからですよ？

感想等受けつけております

STAGE－02　特派とカウンターギアス

ミレイさんが出て行った後、朝食をとり俺達は祖界の散策に出た。

「あのさ、霊夢」
「どうかした？」
「（ここではさ、日本人ってイレブンて呼ばれててブリタニアの植民地なんだよね。霊夢は中華連邦で通るけど俺はどうなるんだ？）」
「大丈夫よ、今髪の色グレイだもの」
「うん、なら大丈夫か。最後に」
「何？」
「そろそろ帰路につかないといけない。迷った…」

マジでここどこだ？迷子とか洒落にならんぞ？ミレイさんに怒られるだろうし…

「人に聞いたら？」
「そうする…」

とりあえず、お巡りか軍人を探す、するとお巡りを発見することが出来た

「すいません」
「はい、どうしましたか？」
「アッシュフォード学園はどちらにありますか？」
「ああ、アッシュフォードですね。ここからこちらに行って……」

話が長いので中略

「そうそう、最近不審者が増えているので気をつけてくださいね。お嬢さんがた」

また間違われた……

まあ、ギリギリだが時間までにアッシュフォードに着いたからいいか

「ゴメン、スザク。待った？」

「いや、じゃあ行こうか？」

「遠いのか？」

「すぐ近くだよ」

本当にすぐ近くだった。

というか向かいの大学

「ここが僕の職場。知ってるぽいけど、特別派遣響導技術部、それが『特派』の正式名称」

「技術部門だから大学内に？」

「んー、まあ、技術部門というか……とにかくちょっと変わったことをしているセクションなんだ」

「ふふっ、たしかにうちの部署のことって、説明しづらいわよね、スザク君」

「セシルさん」

「こんにちは。こちらの二人が、スザク君の行ってた……」

「ええ」

「はじめまして、琴音さん、霊夢さん。セシル・クルーミーです。事情はスザク君から聞いてるわ。今日はよろしくね」

「お願いします」

「検査を受けるのは琴音だけですよ？」

「あ、そうなの？じゃあまずは、あなたの身体のデータをとりましょう。こっちに座って」

「はい」

なんか不安だな…

「しばらくじっとしててね……あれ？このセンサーって、ここでいいのかしら？」

「ちょ、セシルさん大丈夫ですか？」

「機材はここの医学部から借りてきたものだから、大丈夫よ」

「あの、いや、そうじゃなくてですね……」

……

……

…

「はい、終わったわよ。お疲れ様」

霊夢が肩をぽんぽん叩いてくる、励ましありがとう

「どうですか？セシルさん」

「ちょっと待ってね……うん、身体に異常は見られないわ。それにしても、どのくらいの高さから落ちたの？」

「どのくらいの高さだっけ？」

「確か、学園がこれくらいに見える高さだったはずよ」

「え！？そんな高さから落ちて異常がないのかい？！」

「らしいな……」

「それに、彼女の身体能力はスザク君を越えてるわ。神経の伝達系が特に」

「ちなみに俺は男です」

「あら？そうだったの？可愛らしいからてっきり女の子だと…」

「やぁ、スザク君。それに君達が琴音君と霊夢さんだね」
「ロイドさん！」
白衣を着た男――ロイドさんが来た。まあ来た途端俺の検査結果を楽しそうに見ているのだが
「ふ～ん、あ、これ身体能力の測定結果？面白いねぇ」
「霊夢さんは検査しなくていいの？」
「琴音が守ってくれたから大丈夫です」
ピピッ
「ＩＤの検索結果が出たようだね」
「あら？指紋と血液、網膜で検索をかけたのに見つからないなんて……」
「（スザク）」
「何？」
「（あの二人は信頼できる人？）」
「うん、大丈夫だよ。ロイドさんは少し変わった人だけど」
この世界に居なかった俺と霊夢にＩＤが存在するはずがない。ん～本当の事言うべきかねぇ
「ん、霊夢ちょっと」
「何？」
「本当の事言っていいかな？」
「大丈夫、私は琴音の味方よ」
「あの、お話があります」
「なにかな？」
「実は俺達は……」

「ストップ！」
「ふご？ふがふが！？」
スザクが邪魔してきた。
なんだよ
「（待って、今話そうとしていた事はヤバイ気がする）」
その言葉に押し黙る。
確かにそうだが…
「？検索エンジンのエラーかもしれないからもう一度調べておくわね」
「そうそう、スザク君から聞いたんだけど、何かボール状の機械を持っていたらしいね」
スザクを睨む
「ゴメンゴメン、預かってる時に機械をロイドさんに発見されちゃって……そんなにすごい物なの？」
「ああ、ナイトメアに積んだら1機でナイト・オブ・ラウンズを全員倒せる」
「そんな物が！？」
「結局話す事になるか……俺と霊夢はこの世界の人間じゃない。別の世界から来た。そして俺はもう一回死んでいる」
「それって……」
「ああ、まあなんかこの世界を助けて来いって言われて来たって訳だ。あと、スザク、君の意見に俺は賛成だ」
「僕の意見？」
「ああ、組織を中から変えていくっていうやつ、ルルーシュとの話

を悪いが聞かせてもらった」
「うん、それで君達はどうするの？」
「俺はスザクに協力したい。霊夢はいいか？」
「さっきも言ったでしょ？私は琴音についていく」
「さて、セシル君、僕達より年下が頑張るって言ってるんだ。僕らも一肌脱ぐよ」
「そうですね。琴音君、霊夢さん。ＩＤの事は私達に任せて」
「ありがとうございます」

というか、ロイドさんがまともな事を言ったのに二人が目を丸くしていたぞ？

「あ～、琴音君は明日もう一度来て欲しいんだけど」
「わかりました」
「（セシルさん、ロイドさんがまともなことを言いましたよ）」
「（何かありそうね）」
「それじゃあ、今日は失礼します」
「僕はどうすればいいですか？」
「おめでとう！今日のスザク君出番なーし」
「え？」

おお、スザクが呆然としてる。これって送ってやれパターンか？まあ話せるし俺はいいんだけどな

「スザク君、二人を送ってあげて」
「あ、はい」
「さてと、外で待つか」

特派の施設から出ると心地好い風が頬を撫でる。隣を見ると髪を抑

えている霊夢と目が合った

「琴音、死んだって本当なの？」
「ああ、でも今は生きてるから大丈夫だよ」
「そう、お祓いしなくていいのね？」
「生きてるのに成仏しろと？」

霊夢が微笑んでくる、自然と俺も笑い返す。
と、そこへ着替え終わったスザクが来た

「お待たせ！それじゃあ学園に戻ろうか」
「そうだな。そういえばスザクはナイトメアに乗るのか？」
「うん、まあ試作機だけどね」
「世界で初の第七世代……」
「え？霊夢、なんで知ってるの？」
「琴音に教えられたのよ。半分無理矢理」
「琴音、君はいったい？」
「ただの元研究者だよ。今は学生だけどな」
「じゃあ学園に着いたし、またねスザク」
「二人とも、じゃあね」
「ああ、わかんない事あったらなんでも聞いていいからな！」
「ありがとう！その時は頼むよ！」

お互い手を振り合い別れた。すると霊夢が脇腹を小突いてきた

「痛いって、どうした霊夢」
「あんな事言って良かったの？」
「あんな事？」
「なんでも教えるって言う話よ！」
「俺は２５歳だぞ？しかもそこらの教師よりは頭がいいはずだ。何

も問題ないじゃないか」
「はぁ～……分かってないならもういいわ……」
「？なんか馬鹿にされた気がする」
あれか？眠たくて頭が働いてないのか？
「まあいいや、早く寝ろよ」
「わかってるわよ」
「んじゃ、お休み」
少し経つと霊夢は寝てしまった。よっぽど疲れが溜まっていたんだろう。
さてと……C．C．を探すか。
たしかこの時間帯なら校内にいるはずなんだが…
罠でも仕掛けるか…
机にピザを置いてっとこれでオッケー
待つこと数分
C．C．登場
まさかあんなベタな罠にかかるとは……ルルーシュ、少しくらいピザを許してやれよ
「はじめましてだな、C．C．」
「ふむ、ほぉまへはだれだ？」
「まずは、口の中が無くなってから喋ってくれ」
「ん、お前は誰だ？」
「俺は琴音だ、ギアスについて聞きにきた」
「ほう、ギアスを知る者か…ギアスの何についてだ？」
「俺がギアスを持っているか否か」

「なら腕を出せ」
腕を出す、するとC．C．がおもむろに掴んだ。見ている世界が変わる。機械的な世界
「ギアスは……所有しているな。しかしなんだこのギアスは、ギアスを消すギアス？こんな物が…」
C．C．が腕を離すと世界が戻る。
「ふふっ、こんなギアスが存在していたとはな。ギアスを消すギアスだ。ギアス殺しと言うべきか」
「カウンターギアスなんてどうだ？」
「なんの話をしている？だがまあいいだろう。お前黒の……」
「いや、黒の騎士団には入らない。俺は俺の道を行く」
「そうか…ギアスに異変があったらルルーシュの部屋に来い。一人でな」
「わかった、その時はピザを持って行ってやるよ」
「ふふっ、楽しみだな」
「じゃあな！」
カウンターギアスか……
ユフィに掛かるギアスも消せるな理論上はだがな
まあ考えるのは明日にでもするか。寝よ、眠いし
「明日はまた特派に行かなきゃいけないし寝るか」
そう呟いて校舎を後にした

STAGE－02　特派とカウンターギアス（後書き）

テストが終わりそうです。色々な意味で……

更新スピードは……落ちますが感想等、お待ちしています

また見てギアス！

ではではノシ

STAGE－03　シュミレータと程度の能力

朝、目が覚めるとなぜか霊夢が隣で寝ていた。
……よし、落ち着こう。昨日の夜は俺がソファーで霊夢がベッドで寝たはずだ、今は俺がソファーで座って寝ていた。霊夢は俺に寄り掛かるように寝ている。
うん、俺は何もしてないから大丈夫だ、というかこういう事に関してチキンな俺が何かを出来るはずないし。なんとなく頬を突いてみる、起きる気配はないか

「う～ん、どう起きないように離れようか…」
「うん？……ふぁ～……なんで琴音は私の横にいるの？」
「場所を見てみ」
「場所？ソファーの上よ。それで？」
「いやいやいや、ここで寝てたの俺だからな？霊夢はあっちのベッドで寝てたからおかしいじゃん？」
「そういえば、そうね。う～ん、琴音が連れ込んだとか？」
「なんで犯人を俺にしようとするんだ！？」

流石に俺もそんな大胆なことしねぇぞ？
そんな野蛮じゃないしな、どうせ霊夢が寝ぼけて来たくらいがオチだろ

「まあいいわ。朝ご飯にしましょ」
「じゃあ着替えるか。そうそう、学生服が届いたからそれ着ろよ？ミレイさんがわざわざ発注してくれたんだから」
「わかってるわよ」

俺はとりあえず洗面所に待避、学生服を着てみる。

やっぱここの制服カッコイイな

「戻ってきていいわよ」
「りょーかい」

霊夢も似合ってるな。
はは、俺はこんな顔だからなぁ

「琴音も似合ってるじゃない」
「サンキュ、霊夢は似合いすぎだろ」
「そう？それより早く食べましょ」
「はいはい……じゃあ作るよ、パンになるけどいい？」
「いいわよ」

許可が降りたからパンとサラダの組み合わせにした。まあ無難なのを選んだだけだが

「出来たぞ」
「もしかして一人暮らしだった？」
「ん？ああそうだが？どうしたんだいきなり」
「なんでもない、それにしてもこのジャム美味しいわね」
「昨日ちゃっかりセシルさんに貰ったんだ。ああ、あと霊夢さんを護ってあげてねって言ってた」
「ふ～ん、それでなんて答えたの？」

答えにゃならんのか？
ああ言ったけど、本人に言うのは恥ずかしいな

「言わなきゃダメか？」
「タメ、気になるし」

「言った通りに言うからな？当然ですよ。霊夢は死なせませんし、護り抜きます」
「……」
ほら、言わんこっちゃない。顔赤くなってるぞ？たぶん俺もだけどなと、そこで部屋にルルーシュが来た
「……邪魔したな」
「え？ちょ、ルルーシュ！？何納得して出てってんの？！おい！……」
「行っちゃったね……」
「激しく誤解したままな…さて、ミレイさんに言ってルルーシュを弄ってもらうか」
「なんか黒くなってきたわね。主に思考が」
なんか霊夢もこっちに来てからキャラが崩壊気味じゃないですか？
「まあ今日は校内でフラフラするか」
「授業受けたら？」
「テストには出るから俺はいいよ。霊夢こそ授業受けたら？」
「勉強嫌いだからやめとく」
ふと思い浮かんだんだが、歴史が違うんじゃないか？なら歴史は授業に出ないとヤバイ気がする。
「じゃあ、待っててくれ歴史だけは受けてくる」
そして午後
「ただいま……」

「どうしたのよ？」
「歴史が全く違う……軽いカルチャーショックだぞ？」
今日の授業でのカルチャーショックの事を話しているとスザクが来た
「琴音、今日ロイドさんが呼んでたみたいだけど大丈夫？」
「いけね！霊夢行くぞ！」
「わかったわよ…全くなんで忘れるか」
「ははは……とりあえず急ごうか」
なぜかスザクに走るのは止められたので、少し時間が掛かってしまった。
「ようこそ特派へ！君達が来るのを待っていたよ」
「お待たせしました。それでどうすればいいですか？」
「うん、まず君達に見せたい物があるんだ。セシル君シートを取って」
シートが取られるとそこには金と白のナイトメア――ランスロットがあった
「これが……」
「そう、僕が作った世界初第七世代ナイトメアフレーム――」
「ランスロット……」
俺が名前を知っている事にロイドさんが驚いている。この人の驚き顔って新鮮だな
「君にはまだ名前を教えていないのになぁ」
「それよりシュミレータをしないんですか？」

「セシル君、準備は出来てる？」
「出来てますよ」

サザーランドの胴体部分だけのシュミレータの機械に乗り込む。ゲーセンにあった体験型のゲームに似ているなと思い、相違点を探していると音声が入ってきた
「琴音君、聞こえてる？」
「はい、大丈夫です」
「じゃあ、シュミレータを走らせるね。セシル君」
「地形データ読み込み終了、じゃあ操作方法を説明するわね」
「大丈夫です」

ジョイスティックのボールを二回押す、するとランドスピーナーが地面に付く。
そしてペダルを踏み込んでいく、それに合わせて機体のスピードも上がる。
スピードを落とさず１８０°方向転換、動かせる！

「出来るみたいだね。じゃあセシル君」
「はい、地形データ再読み込み、終了」

廃墟のビル群がモニターに映る

「じゃあ目印の所まで出来るだけ早く行って」
「わかりました」

一気にスピードを上げる。少し進むと瓦礫が散らばった場所が見えてきた。そばにあるビルにスラッシュハーケンを撃ち込む、刺さったのを確認する前にハーケンを巻き取るビルの壁を蹴り前方にあったハイウェイに機体を着地させ走る。

「上手いねぇ、しかも最短ルート。でも……」
「ッ！？」
するとハイウェイが崩れ始める、機体のスピードを限界まで出すが間に合わない。ぎりぎりの所でハーケンを前方のビルに撃ち込む、すぐに巻き取りその反動で機体を前に飛ばす。それでゴール
「お疲れ様、これでシュミレータを終わります」

「ふぅ～……」
「琴音！すごいよ」
「いやいや、まだ初心者だから」
「あれで初心者って言われても誰も信じないよ？琴音君、君はそれほどのスペックを持っている。ぜひ、うちに来てほしいんだけどいいかな？」
「考えておきます」
まあ、内心入る気満々だけどな。専用のナイトメア貰えそうだしさ、黒の騎士団に入らないって言っちゃったし
「琴音君、無理に入らなくていいからね」
「もし俺が入る事になったら霊夢もですよ？」
「そこらへんは僕のコネでどうにかするから」
「では、今日は失礼します」
霊夢の手を引いて特派から出ていく。いきなり手を引かれて霊夢が首を傾げているが話は後だ。

「どうしたのよ」
「いや、聞きたい事があってな」
「何？」
「能力は使えるか？」
「ん、試してみる」

霊夢が少し浮き上がった
しかし、それで終わり。う～ん、こっちに来たら制限が掛かるのか？
「それ以上は無理か……なら、スペカは使える？」
霊夢は頷きスペルカードを投げる
「霊符『夢想封印』」
使ってみるも段幕の威力も効果範囲も弱まっている
「ん～……ここでは能力とスペカは弱体化するのか。ありがと、なんとなくこの世界の法則がわかった」
「じゃあ帰ろ？」
「そうだな、ミレイさんから許可も取らなきゃいけないし」
「そうね、今はミレイさんが保護者だし」

これまでのミレイさんの行動に苦笑しながら帰ると部屋にアーサーが居たから生徒会室に連れて行くと俺の入室にルルーシュが驚いていた。どーせ、黒の騎士団の幹部メンバーと連絡を取ってたんだろうアーサーを返して今日は終了した。

STAGE－04　デルタ

次の日の休憩時間

俺はミレイさんを呼び出した。

「お待たせ！ゴメンゴメン、リヴァルが『もしかしてデート？誰とデート！』て五月蝿くて」

「ははは……言ってる姿が思い浮かぶな」

「それで私に用って？」

「ああ、実は軍で働かないかってスザクの上司に言われてさ、ミレイさんには言っておこうと思って」

「軍て……危険じゃないの？」

「特別派遣響導技術部、て所。技術部だから危険じゃないよ。霊夢もだし」

「ならいいけど、条件があります」

「条件？」

ミレイさんが無駄に胸を張って言う、胸を張って言うような事なのだろうか？

「条件その1、学校から通う事、条件その2、時間がある時は生徒会の仕事を手伝う事、

これを守らないかぎり許しません」

「その2が大変そうだな……わかった、条件をのむよ」

「そりゃ、この条件をのまないのは勿体ないわよ、軍にはかわいこちゃんは居ないわよ？

と、琴音は霊夢に夢中だったかしら？」

「ばっ！ちがっ……うぅ」

くぅ、ミレイさんに口で負けた……地味にショックだ…

「まあ、この条件をのんでくれるなら私は止めないわ、頑張んなさい」

「言われなくても、頑張るよ」

ミレイさんが許可を出してくれたので明日から俺と霊夢は軍人になるんだな……想像できんな

とりあえず、スザクの所に行くか。

「よ！スザク」

「おはよう琴音、僕に用事？」

「ああ、昨日ロイドさんに誘われてたのは知ってるよな？」

「うん、特派に来てほしいって話だよね」

「うんで、ミレイさんから許可が降りたから入る事になる」

「そうか、でも僕はおめでとうとは言わない。でも、君を歓迎するよ」

スザクも歓迎してくれたことだしロイドさんに返事をするか

「じゃあ、スザク俺はロイドさんの所に行くよ」

「いってらっしゃい、僕も学校が終わったら行くから」

「りょーかい」

一時的に部屋へ戻る。

もちろん霊夢を連れて行くためだ。なんかぐだぐだしてそうだし

「霊夢行くぞ。ミレイさんから許可が出た」

「へぇ、許可取れたんだ。じゃあ、ロイドさんの所に行くの？」

「そゆこと、さっさと着替えて行くぞ」
「急かし過ぎ、急ぎすぎたら良いことないわよ？」
「いや、まあな、そうだけど、善は急げって言うじゃん？」
「はいはい、早く行きたいなら部屋から出て、着替えれないじゃない」

そう言われていつもの洗面所へ行く
うん、流石にあのまま居たらヤバイもんな

「もういいわよ」
「早いな、おい」

部屋を出て1分て、なんつう早さだよ。
お前男か？って疑うくらい早いぞ？

「んじゃ、行くか」
「走って？」
「いんや、歩いて行くぞ？」
「ふ～ん、急げって言ってたのに歩くの？」
「あ～、まあれだ……世の中知らない方がいいものがあるってことで」
「あっそ、じゃあ歩いていくわよ」
「ゴメンゴメン、ロイドさんだから待たせてもいいかと思ったんだよ」

なんかロイドさんなら大丈夫そうだし、別に急げって言われてないしな。

～ただいま移動中～

「よ～こそ～、いい返事は貰えるかい？」
「はい、特派に入らせて貰います」
「ヤッター！じゃあ早速シュミレータをしようよ」
「ロイドさん！話はまだあるでしょう」
「あ、そうだった。はい、君達二人のＩＤ作っておいたよ」
「ありがとうございます。でもこういうのをどうやって作ったんですか？」
「ふふっ、そういう方面では顔が利くんですよね。ね？ロイド伯爵」
……は？伯爵？
え！？マジで？
と、言うか

「セシルさん、いつのまに？」
「こんにちは、二人とも。ようこそ、特派へ」
「じゃあ早速シュミレータやろうよ！」
「今回もサザーランドですか？」

シュミレータででもいいからランスロットに乗りてぇまあ、あのスペックを持て余すだけだがな

「うん、そうだよ。んふふ、もしかしてランスロットのデータでやりたかった？」
「あっ、ばれました？シュミレータなら大丈夫かなぁって考えてたんですよ」
「シュミレータ内ならいいよ。セシル君、よろしく」
「はい、琴音君。ランスロットはかなりピーキーだから気をつけて」
「わかりました」

何だか緊張してきたな。今回はどんな内容なんだろうか？

まさか、行けるとこまで行ってみようみたいなのじゃないよね？
シュミレータとは言え初めての戦闘がそんなので始まるわけ……

「じゃあ行けるとこまで行ってみようか」

ぽんっ

やめて、霊夢そんな同情の目線を俺に向けないで……確かに準死亡フラグ立てたけどさ。
いいじゃん、ランスロットに乗るの夢なんだぜ？

「わかりました。やってみます」

本当にこれが大変だった

「ただいまより始めます。特派ランスロットは前方の森に居る敵部隊を撃破してください」
「イエス・マイロード」
「あら、その言葉いつの間に？」
「いえ、ちょっと勉強をしました」

ペダルをおもいっきり踏み込む。サザーランドとは比較にならないくらいのスピードで森を駆け抜ける。

「見えた！」

敵は無頼三機の小隊、なんだ大丈夫そうだな
ヴァリスを無頼に撃ち込む、すると無頼は散開した。
まず一つ目だ木々を使いながらスローラムの要領で近付いて行く

「はぁあ！！」
ＭＶＳを横に薙ぎ払う！
すると無頼が腰から滑り落ちた
「！」
無頼がスタントンファーを構えて近付いて来る。
しかし、ＭＶＳで機体を守ろうとすると無頼はスタントンファーごと肘から先を切り裂かれる。
残りの一機がアサルトライフルをばらまきながら突っ込んでくる。
しかし、弾は無茶苦茶に飛んで来るものの機体の動きは単純、ただ一直線に来るだけ
「ならこっちがやる事も単純だ」
無頼はスタントンファーで攻撃してきた。
トンファーの間合いから半歩下がるだけで空振る。
そこで腕に装備されたスラッシュハーケンを撃ち込む！
無頼は両腕を落とされ、しどろもどろしている内に背後に居た無頼とをＭＶＳで貫く。
「一小隊撃破っと」
＊＊＊霊夢目線＊＊＊
「一小隊撃破っと」
と通信機から琴音の声が聞こえてきた。まだ余裕そうね

そして、２４分後

「敵機増援、無頼６、サザーランド４！？特派ランスロット左肩被弾、
損傷軽微エナジーフィラー残量４５％頑張って！」

モニターで見ていると、途中でスザクが入ってきた

「やあ、霊夢。琴音は？」
「ロイドさんのひどいシュミレータをやってるわ」
「あ～あれか、あっ、今回はランスロットのデータでやってるんだ」

また、モニターを見てみる。今度は紫色の機体と戦っているようだ。
でもこれまでと敵機の動きが違うかな？

＊＊＊サイドアウト＊＊＊

「はぁ！？グロースター！？」

ブレイズルミナスでグロースターのアサルトライフルを防ぎヴァリスで応戦する。
しかしグロースターに気を取られていてサザーランドの接近を許してしまった。
「クソ！この距離じゃ！なら」

バリスを持ったままスラッシュハーケンを無頼に射出する。
だが、ヴァリスをグロースターに破壊されてしまう。
しかし、ＭＶＳを構えグロースターに急接近する。そして両腕と頭を斬り飛ばす

「ロイドさん！スラッシュハーケンを四つ撃つための解除コードは！？」
「あれ？何で知ってるのかな。まあ、解除コードは僕の好物だよ」
プリンか！なら……
スラッシュハーケンを四つ射出し腕を細かく動かす
＊＊＊スザク目線＊＊＊
「すごい……あのランスロットをあれだけ使いこなすなんて」
僕でも出来るかわかんないな、特にスラッシュハーケンをあやとりみたいに使うのは
「敵部隊増援、無頼６、サザーランド４、グロースター２。左脚部中破。
エナジーフィラー残量２４％。ロイドさん！やり過ぎです！」
「僕のランスロットだから大丈夫だよ」
さらに１５分後
「敵部隊増援、サザーランド１７、グロースター６。
右腕大破、頭部被弾、損傷軽微。エナジーフィラー残量５％」
シュミレータ終了
＊＊＊サイドアウト＊＊＊

「いやぁ、すごいねぇ」
「ロイドさん！何ですか！あの内容は」
「えっ、なんかダメなの？」
「教えて差し上げましょうか？」
「いえ、結構です。それにしても汗だくだねぇ」
「そ、そりゃ汗だくにもなりますよ」

あ～息が落ち着かないや

「何機倒したんだい？」
「え～と……無頼５８機、サザーランド４３機、グロースター２７機ですね」
「ランスロットとの適合率は？」
「８４％です」
「琴音、凄いよ！僕だってそんなには…」
「スザク君、君はちなみに９０％台だよ」
「あっ……えっと…」
「ぷふっあはははは！」
「笑わないでよ。でも、あれだけの動きが出来るんだ。僕も安心して戦えるよ」

まあ、死ぬつもりはないけどな。死んじまったら霊夢も守れないしな。

「ランスロットは君が使ってくれ俺なんかじゃ無理だよ。それに俺の機体は自分でなんとかしたいし」
「琴音君、じゃあ機体を作るのを手伝ってくれないかなぁ。君の持ってる技術も気になるしねぇ」
「わかりました。でもあまり教えられませんよ？部分的にオーバーテクノロジーなんで」

「じゃあ、行こうか」
「そうですね。霊夢ちょっと待ってて」
「はいはい、怪我しないでね」

～移動中～

「それでこれが設計図なんだけど…」
「コアルミナスの設計図見せてもらえますか？」
「別にいいけどどうするんだい？」

やっぱりな……もう少し無駄を削れば小型化出来る。
あとはそれで出来た空間でコックピットも小型化出来ればあれも出来るしな、
あとドライブを設置すれば理論上はランスロットの出力を越えるな

「ここととここを小型化してここを削れば小型化出来るはずです」
「はぁ～そこまでは知らなかったねぇ」
「この大きさでこの出力はおかしいですもん。
フレームの制作はここのスペースを広げてくだされば良いです。装甲と一部武装は俺に任せてください」
「じゃあ、君が行った時、炉が使えるように言っておくよ。ついでに名前はどうする？」
「ランスロット――ランスロット・デルタ」
「わかった、じゃあ、装甲はよろしくね」

こうして、俺とロイドさんでデルタを作る事になった。

ＳＴＡＧＥ－０４　デルタ（後書き）

主人公機がついに出ますよ！

STAGE－05　デルタの鼓動（前書き）

ＨＡＨＡＨＡ！サブタイトルのパクリっぽさは気にしないでください

STAGE－05　デルタの鼓動

特派でパソコンを借り、装甲の制作に関する情報をまとめている。今回作るのは某機動戦士のＰＳ装甲ってやつだ。あの電気流したら固くなるやつ、大半は完璧なのだが色と材料で頭を抱えている。まず色、ランスロットなのだから白が入るのは当然、赤いクリスタルのような物はオレンジ、問題は金色にあたる部分だ。霊夢に聞いたら『銀色でいいんじゃない？』って言われたが銀色はＰＳ装甲じゃ出しづらい色ナンバーワンなわけで結局……

銀色にしました☆

武装についてはビームサーベルを二振り、あとゾ〇ドのパンツァーユニット的な物も作る予定

「ふ～ん、こんな技術があったなんてねぇ」

「あ、ちょっ、見ないでくださいよ。これ俺の持ってる技術でも最高ランクのオーバーテクノロジーなんですからこの世界では一機あれば十分です」

こうして今日は特派を後にした

～五日後～

「ロイドさん、例のフレームはできましたか？」

「急ピッチで作ったから出来てるよ」

「大丈夫ですか？」
「大丈夫大丈夫、それよりも早く作ろうよ！」
「わかりましたよ。機体の表面が出来てもプログラムを組まないとPS装甲は使えませんよ？あと凄い物があるんです」
「デルタより凄い物はないと思うよ？」
「ふふふっ、来いライガー」

俺がそう呼ぶと小型犬のデカイ方くらいのメカが歩いてくる。外観はライガーゼロを考えてくれればいい

「なんか、毎回ドライブって言うのもなんだったので自律型のロボットにしました。もちろん新素材の装甲ですよ」
「君は僕の良いデバイサーでありながら良い研究者だよ」
「さあ、デルタを完成させましょう」

クレーンを使いデルタを汲み上げていく。コックピットは小さめ、OSを汲み上げて完成するまで時間が掛かったが凄い物が出来た

「じゃあ、ロイドさん、動かしますよー！」
「頼むよ～」
「ライガー頼む」
（ガゥ！）

ライガーが一声吼えてデルタの心臓部と融合する。するとさっきまで灰色だった機体に色が付いてゆく。美しい白の中に輝く銀、そして胸部にあるオレンジ。そして、額から突き出た二本の角

「それにしても、なんで胸の所に獣の顔を？」
「これは隠し玉ですよ。ああ、それとまだ予算あります？」
「僕もちょっと開発したい物があったから少し多めに貰える様にし

ておくよ」
「ありがとうございます」
「早く動かしてよ～」
「でも、今日は演習に参加させて貰えるんですからいいんじゃないんですか？」
「早く～」
「わかりましたよ」
「やったー！」

用意された的をＳＨ－０４ビームアサルトライフルで撃つ
当たった瞬間穴が開くのではなく的自体が溶けてしまった。うん、これはただのＳＨ式にしないと危険だな。

「次はサーベルを見せてくれないかな？」
「いいですよ。そのかわり厚さ３０？以上の厚さの鉄板でお願いします」
「う～ん、あるけど運べないよ」
「ロイドさーん、早く用意しないと演習に遅れてデータ取れませんよ～？」
「あっ、スザク君。いいところに来たね」
「え？あ、はい。なんですか？」
「倉庫から３０？の厚さの鉄板をランスロットで運んでくれる？」
「？いいですよ」

そしてスザクがデルタを見上げてビックリしていた。まあ、胸部分からデカイ刃が出てるからな
少ししてスザクが鉄板を運んで来てくれた。
デルタの腰部分のハッチが開きサーベルを引き抜く、すると赤っぽいオレンジの刀身が現れた

「ロイドさん、行きますよ」
「本当に切れるの？琴音」
「まあ見てなって」
スッと横に振るうと鉄板があっさり斬れた
「ほら、切れるだろ？ＭＶＳのような実剣じゃなくてビームの刀身だけど切れ味は一番いいはずだ。ちなみに質問は受け付けません」
「……」
「早くしないと演習に遅れますよ？」
「そうだった。スザク君も琴音君も機体をトレーラーに乗せておいて」
「「はい」」
それからデルタとランスロットをトレーラーに積み込む。
すると、デルタを見上げながらスザクが話しかけてきた。
「琴音、この機体は何のためであるんだ？」
「うん？」
「大きな力は人を殺す。身体もだけど搭乗者の心も」
「そーだな。でも、大きな力は諸刃の剣だぞ？味方や人々を助ける事ができる。その代わり相手を傷つける、それの魅力に魅入られると自分の心もダメになる。けど、それさえ克服できればその力はみんなを救う事の出来る物になる。……まあ、使う者次第なんだよ。こーゆーものはさ」
それだけ言って黙ってみる。この話をどう受け取るかはスザク次第だしな。
にしても、デルタの追加装甲兼武器のデザインどうすっかねぇ。ミサイルポッドを2，3倍つけてキャノン砲でも付けるか。色は……

市街地戦用の迷彩パターンでいいか。
と、演習があったな。正直、戦争屋なんて柄じゃねぇんだけど入っちまったモンはしょうがねぇか

ＳＴＡＧＥ－０６　模擬戦（前書き）

すいません。お待たせしました

そして、短いです。すいません

STAGE－06　模擬戦

演習場ってここか？
ゲットーの一部か……ってここ秋葉じゃん！あぁ、歩行者天国が演習場に……

「なあスザク」
「どうかした？琴音」
「ここって秋葉原だよな？元」
「うん、今はこんなんだけどね」
「行きたかったなぁ……秋葉、パソコンのパーツとか、はぁ」
「もしかして、琴音ってオタクってヤツなのかい？」
「そうなるなっと、スザク。セシルさんが呼んでるからあとでな」
「うん、がんばって。そうだ、Gに気をつけてね」
「りょーかいした」

さてと、これからの演習って何戦だ？

＊＊＊＊

『模擬戦を開始します。両者開始位置についてください』
「イエス・マイロード」
『では、模擬戦を開始してください』

開始の合図がかかった瞬間ドライヴの出力とコアルミナスの出力を瞬間的にあげ距離を詰める。
相手はそのスピードに焦ったのかスタントンファーを展開して上から殴り掛かってきた。それを腕で捌き回し蹴りを胴に決める。これで相手は大破に相当するダメージを受けただろう

「ス、スザクの言う通りGが凄いな。けど、コイツにはシートベルトがあるからそこまで振り回されないんだよな。これが」

『両者開始位置に戻ってください。これで本日の模擬戦を終了します』

＊＊＊＊

「お疲れ様、琴音。よかったんじゃない？」

「まあね。でも、やっぱり身体がGに持ってかれかけたよ」

「琴音！君は本当にナイトメアに初めて乗ったのか！？」

「うん？初めてだぞ？」

「嘘だろ？初心者が初騎乗であんなに上手く出来るわけないよ」

「それをこなした君が言っても説得力ないよぉ～」

「ロイドさん……」

この人とは、口論をしたくねぇな。絶対負ける。

「そ～だ。二人に伝える事があったんだった。すぐ帰るよ。周りの連中がランスロットとデルタに群がってくるから」

「あっ、はい」

「ほら、二人とも。飲み物あとで渡すから、さっさとロボットをしまっちゃいなさい！」

「霊夢、だからこれはナイトメアだってば」

「でも、ロボットでしょ？」

「スザク、諦めろ。何を言っても無駄だ。変な所で頑固だからさ」

「変とは何よ。変とは」

「基本どうでもよさそに見てるじゃん？だから」

「妙にあってるから反論に困るわね……」

「とにかく～早く帰ってデータを見たいんだよ～」
「「「わかりましたから、少し黙っててください」」」
「ロイドさん、３人とも息あってますね」
「そうだねぇ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2347m/

コードギアス反逆のルルーシュ～双璧の白騎士～

2010年11月16日20時18分発行